



Title	円地文子「交配花」論 : 『源氏物語』「橋姫」巻との関係から
Author(s)	齊田, 春菜
Citation	研究論集, 20, 53 (右) -62 (右)
Issue Date	2021-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.20.r53
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80799
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_rjgshhs_20_053-062_r.pdf



円地文子「交配花」論——『源氏物語』『橋姫』巻との関係から

齊 田 春 菜

要 旨

本稿は、円地文子の「交配花」を『源氏物語』『橋姫』巻から検討するものである。「交配花」の書かれた時期は、円地が『源氏物語』の全訳に取り組んでいる最中であつた。円地はこの期間、長編作品を一切書かず、短編または中編のみを書いていた。

「交配花」の語り手の「私」は、円地と同じく、『源氏物語』の口語訳をしていたり、『源氏物語』の冷泉院と薫の君が実の父を知った時に対する態度について独自の解釈を会合で披露したりしている。この解釈は、後に執筆された円地のエッセイと内容が一部重なる。そのため「交配花」と円地の『源氏物語』現代語訳との関係を考える必要がある。

そこでまず、語り手の「私」と沙野が語る物語について検討を試みた。沙野が「私」へと物語る森脇夫妻の物語のあり方は、語りの事後性と構築された叙述によって編集されていた。そのため、森脇夫妻の物語にある種のノイズが生じたことを指摘した。次にこのノイズによって「交配花」が『源氏物語』の「橋姫」巻のバリエーションとなったことを論証した。特に、森脇美鶴に付与された「霊媒」という言葉の意味と円地のエッセイを手掛かりにした。最後に「交配花」の批評性について『源氏物語』を軸に明らかにした。「交配花」は、男性が能動的に密通を行う『源氏物語』を逆転させ、女性が能動的に密通を行う物語を提示する。そして、それは、『源氏物語』の「橋姫」的なモチーフや人物像を次々と変形したことも関係するのである。またそのことから「交配花」における森脇明郷の自殺についての再検討を行った。

つまり「交配花」は、沙野によって「私」に語られた森脇夫妻の物語が『源氏物語』『橋姫』巻と結びつけて解釈できる作品となった。したがって、円地作品と『源氏物語』の現代語訳との関係の一端を「交配花」から明らかにできると結論付けた。

一 はじめに

本稿は、円地文子作品と『源氏物語』の現代語訳との関係の一端を「交配花」(一九七〇年)から検討するものである。

円地文子「交配花」は、一九七〇年七月『小説新潮』に掲載され、一九七四年五月に単行本『花喰い姥』(講談社)に収録された。円地は一九六七年に『源氏物語』の全訳を新潮社から依頼され専念していたこの時期、その刊行が終わるまで(一九七二年九月—一九七三年六月)長編作品を一切書かず、短編または中編のみを書いていた。「交配花」は、その期間に書かれた作品のうちの一作でもある。

「交配花」の語り手の「私」は、「源氏物語の口語訳という手に余る仕事に時間を費やしている」(一八九頁)最中と設定されていたり、『源氏物語』の冷泉院と薫の君が実の父を知った時に対するあり方について「私」の独自の解釈を会合で披露したりしている。この冷泉院と薫の君の解釈は、後に執筆された円地のエッセイと内容が一部類似する(後述)。つまり「交配花」は、円地の『源氏物語』現代語訳と関係のあるテキストとして理解できるだろう。内容については、物語内容の一部が「全くややこしい話」(二〇八頁)であるため、端的にまとめた土屋萌子の「交配花」の概要を参照する。

源氏物語の現代語訳をしている「私」は、冷泉院・薫の君が本当の父を知った苦しみを、ある会合で話した。すると、三十過ぎの艶かしい婦人が、貴族にとって父が違うのは当たり前

ことであり、罪の意識を感じるのは、中流階級の倫理観だと反論した。その女性は、森脇商事の副社長の森脇明郷の妻美鶴であった。森脇商事は、農家出身の森脇吉兵衛が戦争をきっかけに発展させた会社で、彼は貴族階級への憧れから、旧主人で宮家と縁戚関係の深い雪谷伯爵の息子を養子とする。それが明郷だが、実は雪谷の妻が浮気をして、生じた子だった。男系の血を入れた吉兵衛は、雪谷が外で作った美鶴を明郷の妻とする。美鶴は、自身もまた夫以外の男性と関係を結び、子を生す。一方美鶴に振り回され、自身の血統にも疑いを感じた明郷は、愛人である「私」の友人河内沙野の部屋で自殺を遂げた。¹

明郷の出生や血統を軸に物語が展開するため、『源氏物語』『橋姫』巻との関係を想起できる。

一方で、「交配花」についてまとめた文章は管見の限りにおいて、先の土屋の資料以外はない。円地(作品)と『源氏物語』というテーマにおいて「交配花」は、重要な作品であると考えられるが、着目されているとは言い難い状況である。その背景にあるのは、おそらく円地(作品)と『源氏物語』を研究する際には上坂信男のよう²に「この作者にとって、『源氏物語』が血肉化している証と言つてよからう」といった『源氏物語』の内容やモチーフを円地の作品にあてはめ、その関係について論じている傾向があるためであろう。したがって『源氏物語』を現代語訳するという、書くことや語ることとをめぐる問題について検討するために「交配花」を考察するべき

であろう。「交配花」を論じること、語り手の「私」を含む女性たちの機能や円地の『源氏物語』解釈を軸に『源氏物語』現代語訳との関係の側面を明らかにしたい。

二 語り手の「私」と沙野が語る物語

「交配花」は、「私」という一人称の女性が語り手として物語を語るテキストである。「私」は、冒頭で「今、源氏物語の口語訳という手に余る仕事に時間を費やしている」（一八九頁）最中にあり、「今年の春」に行った「源氏漫談」（一八九頁）をきっかけに遭遇した出来事について語る。これは、いわゆる回想形式の物語である。

「交配花」で特徴的なことは、森脇明郷とその妻の美鶴などの人物の情報の多くが沙野から聞いた話を基にしたものとして「私」が語っている点である。しかし、その情報の語られ方や構成方法は、かなり作想的に編集されている。例えば、物語の中盤以降で突然「私」は、「断わっておくが、この話の前の部分でも、明郷と美鶴のこみ入った結婚についての話などは、この日沙野から聞いたことの方が多い」（二二五頁）と述べる。これによって、この前に語られた物語内容は、沙野が実際に「私」に話した順番をそのまま再現しているのではないことが明らかになる。また、語り手の「私」は、「伏せ字の部分を補う作業は、慣れているため、沙野に「話したくないことは話さなくて結構よ」と伝える。それに対して沙野は「知ってるよ、そんなこと」（二二五頁）と返答した。

さらに、沙野は「私」に対し、明郷について次のように語る。

「終戦の時、あの人は八つぐらいじゃなかったのかしらん、兎も角正妻って人は自分に子供がなかったんで、あの人を雪谷様の御胤だというんで下にも置かず育てたのよ」〔…〕

「明郷さんははじめこの話の出たときには、あの人と結婚することを絶対に反対していたのよ。〔…〕ほんとうを言えば、一番嫌いなのはそういう汚ない年寄りたちの策謀を、一向厭だと感じないあなたの不潔さだなんて」（二〇四―二二二頁）

「私」は、沙野の説明をこの場面で括弧を使用した直接話法で叙述した。これは、沙野の話したこととして読み取ることができるだろう。しかし、語り手の「私」が「その晩沙野の用意してくれた木屋町のお茶屋で」（二〇三頁）次の質問をした以降、「私」が「豊中の彼女の家を訪れ」（二二〇頁）るまで、沙野が直接説明している表現はなくなる。

「そうしたら美鶴さん、どういったの、黙って涙でもこぼしていた？」

ところがそうではなかったと沙野はいうのである。

美鶴はその時も、蔑むような侮るような微笑みを頬に溜めながら言った。

「不潔なおとしやるけれども、その不潔さの中に、私たちの長い間保つて来た誇りが沈んでいることがあなたにはおわかりになりませんの……それはきつと明郷さまが、お小さい時に森脇のような地下の家へ御養子においでになったからですわ。

「…」(二二二頁) *傍線は引用者

この引用は、結婚前の美鶴と明郷との対話場面として設定されている。ここで重要なのは、傍線部にある「その日も」という表現である。この場面以前に美鶴が「蔑むような侮るような微笑み」をしたのは、「私」が沙野に会う前に行った「源氏漫談」の会場であり、「そこで女のひと(美鶴を指す——引用者注)は又、あざけるような蔑むような、その癖ひどくなまめかしい微笑みを白く柔らかい頬に浮かべた」(一九三頁)のである。もちろん実際の出来事として起きたのは、結婚前に美鶴が明郷に「蔑むような侮るような微笑み」をしたのが先である。そして、その微笑みを語り手の「私」にしたのはその後である。しかし、先の引用では語り手の「私」がこの場面を語っているため「美鶴はその時も、」という表現になったのである。つまり他の場面も実際に沙野が語り手の「私」に語ったことをそのまま「私」が語っているわけではないと解釈できる。したがって、森脇夫婦についての説明は、沙野の口から直接話した部分と語り手の「私」がそれを補ったと考えられる場面がある。すなわちあたかも実際に美鶴や明郷が話したかのように書かれている個所がいくつもある。つまり、このことによって美鶴と明郷の挿話は、作法的に

編集、綿密に構成されていることが読み取れるのであり、かなり構築された物語であることが叙述によって明らかにする。「私」は沙野が話していないことを想像力で埋めるといふ「伏せ字を補う作業」、つまり、物語能力を出すことを沙野に期待されていたのであった。

一方で沙野が「私」に話した物語内容について、土屋萌子は「美鶴という妖婦を主軸として、女の情念としたたかさをまざまざと描いて見せた」とまとめる。結論からいえば、沙野が「私」に語るうとした内容はこのことであつた。なぜなら、沙野は美鶴が明郷の劣等感を刺激し、自殺へと追い込んだと思っているからである。例えば「…」明郷さんがあの美鶴という女と結婚さへしなかったら、あの人はあんな蟻地獄みたいところへ落ちこみもしなかったろうし、従つて、今のうちに森脇の副社長になれたかどうかかわらないけれども、生命の方は長くもつていただろうと思ふわよ」(二二四頁)、「美鶴という女はね、明郷さんをさんざん道具に使つた上で、もう使いものにならないとなつた頃を見計らつて、あの人の急所を一突きにしたのよ。まあ、誰もそのことをあの人の指図だといふものはいないけれども、私の眼は騙せないわ「…」」(二二七頁)という部分から明らかである。さらに、「私」によつても「私はふとあの木屋町の茶屋で、沙野が美鶴を評して、「あの人は妖婦よ」といった言葉を思い出した」(二二〇頁)と美鶴が妖婦であることが繰り返して語られる。

では、沙野以外の人間には美鶴がどのように見えていたのだろうか

か。分かりやすい例は、ある日語り手の「私」が見つけた新聞記事である。その見出しは「森脇商事副社長服毒自殺、愛人室内デザイナー宅で」（二一八頁）と書かれている。沙野と語り手の「私」以外の周囲、いわゆる社会的に見れば、既婚者の森脇明郷と関係のある沙野は「愛人」だと言われるだろう。それから数か月後、「私」はこの出来事の「真相の真相」（二二五頁）を聞きに沙野の家へ向かう。そこで、沙野は美鶴について「世間でいつでもそういうものよ。ほんとうの加害者は被害者として同情されて、私のような、言わば、飛ばしりを食って渦に巻きこまれたようなものが、結構、森脇明郷を自殺にまで逐い込んだ妖女なんて、加害者のレッテルを張られるんだから「…」」（二二四頁）と説明をする。すなわち先の新聞記事にあった「愛人」という言葉は、沙野を妖女として加害者性を付与する言葉として作用していた。しかし沙野はそれを否定し、あくまでも美鶴を加害者として「私」に語っている。そして「私」は沙野が美鶴を「妖婦」と語っていることに一定の共感を示しているが、あくまでもそのイメージは、「私」によって沙野が語ったこととして強調される。

つまりこの沙野が語る美鶴のイメージは沙野の言い分しか語っていないことが語り手の「私」によって表現されている。この沙野の語る美鶴のイメージは、土屋が指摘した「美鶴という妖婦」だとと言えるであろう。しかし、「交配花」は『源氏物語』のイメージが挿入されており、沙野と関係のあった明郷は『源氏物語』の薫のイメージがテキストの語りによって付与されることになる。さらにそこか

ら明郷に関係した人物たちも『源氏物語』のイメージと無関係ではいられない。そのため、美鶴は沙野が語った「妖婦」とは言えなくなっていく。沙野は明郷が自殺した後「言語喪失症みたい」（二二二頁）になりそこから回復した。そして沙野は、「私」に伏字の部分を埋めてもらうため、森脇夫妻の物語を語った。しかしその物語は「私」に語られることでノイズが生じてしまうのである。

三 「交配花」と「橋姫」巻

「私」は、『源氏物語』の口語訳をしていて、美鶴と最初に会った場所が「源氏漫談」（二八九頁）をした会場である。また、「私」は、沙野の語る明郷の出生の物語について「源氏物語的かな」（二〇八頁）と感想を述べる。

さらに『源氏物語』の関係から考えれば、沙野が何気なく語った美鶴についての説明にある「霊媒」という言葉も重要である。沙野は「…」あの美鶴って女に取柄があるとすれば、そういう過去の亡霊をあるものと信じきって、結構その霊媒になって、森脇家へ乗込んでしまった自信だけですものね」（二〇八頁）と言う。美鶴は「霊媒」となり「特権階級の既に空手形となった意識」（二〇二頁）を持つ「過去の亡霊」と森脇家との間を明郷と結婚することで媒なだちした。なお「特権階級の既に空手形となった意識」とは、子供の戸籍上の父親が必ずしも実の父親とは限らないという「父系の血に対する不信論」（二〇一頁）を常識としてしていることである。

一方で『源氏物語』の「橋姫」巻に類似した言葉が出てくる。それは薫が弁の君について「巫女」という言葉で説明をしている場面である。原文は「あやしく、夢語、巫女やうのものの問はず語りすらむやうにめづらかに思さるれど」⁴であり、この部分を円地は、「中将の君は怪しく心が騒いで、夢の中の話か、巫女の類いが問わず語りでもするのを聞いているように珍しくお思いになる」と訳した。

この場面は、薫の出生の秘密について物語る弁の君について薫が感じたことを叙述している。また美鶴は、「あなたのほんとうのお父さまというのは雪谷のお父様のお友達で、私の母の面倒もみていらした先代の万里大路さまなのですよ」(二二三頁)と明郷に話す。この言葉は明郷に「勇気呼び起こした」(二二三頁)。なぜなら、「彼は今まで自分の父が雪谷家の自動車の運転手」(二二三頁)だと聞かされていて、一方万里大路は「貴族政治家」であったため「ねじれた劣等感が自然にときほぐされて行つた」からである。このように美鶴は弁の君の役割を想起する人物としても解釈ができる。ただし、この情報はのちに「明郷さんは自分が万里大路伯爵の子でなくって、やっぱり運転手の花巻留三の胤だと知ったときに最後の止めを刺されたのね」(二三〇頁)と沙野に語られ、嘘であったことが分かる。したがって、美鶴は、弁の君的な役割を担いつつそれを変形させた人物であろう。つまり、美鶴について述べた「霊媒」という言葉は、一つは先に指摘した特権階級的な思想を持つ「過去の亡霊」と森脇家を嫌(なぐさ)んだことを指し、さらに『源氏物語』の「橋姫」の内容を想起させる機能を持っていた。

また、この「橋姫」の内容を強く意識できるのが「私」が「冷泉院や、柏木と女三の宮の秘密を知つた薫が、表向きの父親に対して慚愧する感情がまことに薄く、それよりもほんとうの父である源氏や柏木に対して、父子の礼や愛情を示し得ないことについての罪の意識の深いのに、不思議な感情に捕らえられる「…」」(二八九—一九〇頁)と『源氏物語』を解釈している部分である。この内容は、テクストが発表された約二年後に書かれた円地文子のエッセイでも同じように「…」私にとって、不思議なのは、この物語中のほかの二人の人物、即ち冷泉院と薫が、いずれも自分の公然の父と実の父、又密通によつて自分を生んだ母親に対して示す反応と、罪の意識の有り方についてにはかならない」と叙述され、内容が反復されている。さらにこのエッセイでは次のことも追加されている。

薫も冷泉院と同じく生母は内親王であるから、その点では、父系の血統がいくらか降つても、彼の誇りは傷つけられないのかも知れないが、薫の性格に籠められている陰影がこの誕生の秘密にあるだけに、柏木の遺書をよんでの後の薫に、それがさしたる影響になつて変つて来ないのは私には不満である。⁷

つまり、エッセイは「柏木の遺書をよんでの後の薫に、それがさしたる影響になつて来ないのは私には不満である」と内容が発展しているのである。このエッセイの初出は「交配花」よりも後⁸であるが、少なくとも『源氏物語』の現代語訳をしている最中から刊行

するまでの間に、円地が薫や冷泉帝の罪の意識の書かれ方に不満を持っていたのは明らかである。

したがって、『交配花』に『源氏物語』の現代語訳をする作家の「私」が導入された理由は、この作品を『源氏物語』の「橋姫」巻のバリエーションとして作り上げることにあった。

四 「交配花」の批評性——『源氏物語』との関わりから

美鶴を「妖婦」と述べる沙野によって語られた明郷は、土屋萌子が言うように「一方美鶴に振り回され、自身の血統にも疑いを感じた明郷は、愛人である「私」の友人河内沙野の部屋で自殺を遂げた」のである。その背景には、沙野が「……」明郷さんがあ的美鶴という女と結婚さえしなかったら、あの人はあんな蟻地獄みたいところへ落ちこみはしなかったろうし、従って、今のようには森脇の副社長になれたかどうかかわからないけれども、生命の方は長くもつていただろうと思うわよ（二二四頁）と語る。また美鶴が明郷に万里大路の子供であると伝えられる以前の彼は、自身が雪谷の子ではないということが大学を出たての頃に明らかになり、その当時、「相当ひどいショックだったらし」く、「本心は森脇商事二代目の座には坐りきれない気持ちになっていたんじゃないかしらん」（二〇五頁）と言われていた程である。さらに、「……」あの人死め晩にはそのことを言っていたわ。おれはあいつのわなにかかったって（二二七頁）とも沙野は述べている。つまり沙野は明郷の自殺が美鶴によつ

て引き起こされたと言っているのである。したがって「明郷さんは自分が万里大路伯爵の子でなくて、やっぱり運転手の花巻留三の胤だ」と知ったときに最後の止めを刺されたのね」（二三〇頁）と沙野から明郷の自殺の原因が「私」に語られる。

しかし、前節で見てきたように『源氏物語』を踏まえると、物語における明郷の自殺の位置づけを行うことができる。なぜなら、「実はあの前後（「私」の「源氏漫談」があった日を指す——引用者注）から、明郷は前よりも頻繁に沙野と逢うようになっていた」（二二五頁）からである。そのため明郷と沙野の関係は「私」の「源氏漫談」の日の前後から再び始まっていたのであり、明郷の自殺は、『源氏物語』と関わらせて解釈すべきであろう。

注目すべきは、前節で引用した円地のエッセイの後半の内容の「冷泉院が始終ワキ役であるに對して、薫は宇治十帖の主人公なのだし、濁世厭離思想と罪の意識は、もう少し鋭く切りあつてほしい気がするのである」¹⁰という部分である。したがって、「交配花」は、円地の『源氏物語』の薫の罪意識を記述した紫式部への「濁世厭離思想と罪の意識は、もう少し鋭く切り合つてほしい」という思いから『源氏物語』の「橋姫」の薫像を再創造した一面もあると考えられる。しかし明郷は薫と異なり自身の出自が二転三転し、最後には絶望し自殺をする。この作り出された明郷のイメージは、「橋姫」の薫の罪を父への罪の物語として語り直した結果ともいえるのである。また明郷が薫的な人物として捉えられる背景は、さらに時間を遡って検討したらどうだろうか。この明郷の実父をめぐる物語は、

「女三の宮と柏木衛門督との密通」(一八九頁)との関係から読み解くことができる。『源氏物語』の薫は、周知のとおり光源氏の子ではなく女三の宮と柏木衛門督との間に生まれた子供である。また「交配花」の明郷は、「つまり、明郷さんは雪谷夫人の生んだ子ではあるけれども、雪谷家の男系の血統ではなかったわけよ」(二〇四―二〇五頁)と説明されていた。そのため、この部分からも『源氏物語』の薫と「交配花」の明郷は重なる。

ただし、「女三の宮と柏木衛門督」との密通とは大きく異なる。確認のため『源氏物語』の該当する原文と円地訳を引用する。

【原文】

宮は、何心もなく大殿籠りにけるを、近く男のけはひのすれば、院のおはすると思したるに、うちかしこまりたる気色見せて、床の下に抱きおろしたてまつるに、物におそはるるかと思せめて見開けたまへれば、あらぬ人なりけり。あやしく聞きも知らぬことどもをぞ聞こゆるや。あさましくむくつけくなりて、人召せど、近くもさぶらはねば、聞きつけて参るもなし。わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色、いとあはれにらうたげなり。¹¹

【円地文子訳】

宮は何心もなくお寝みになっていたのに、身近く男の気配があるので、殿がお出でになったとばかり思っていらいっしやると、

かしこまった態度を見せてそつと御帳台の下にお抱き降ろし申したので、夢の中で恐ろしいものに魔われたようで、やつと眼を上げて御覧になると、殿とはまったく別人であった。あやしく、何やらわけの分らぬことばかり申上げつつけるではないか。宮は驚きと気味悪さに怯えて、人をお呼びになるけれども、近くには人気もないので聞きつけて参るはずはない。わなわなと慄えていらっしやる御様子には、御召物に波うって、お肌えは水のように汗にあえ、半ば正体のない御有様が、ほんとうにわたしにはあるが、可憐なこともこの上ない。¹²

『源氏物語』では、女三の宮は「おびえている」が、それに対して、「交配花」の明郷の実母の牧子は手紙で「この文をよんだら箱根の別荘まで忍んで来るように」(二二八頁)と、密通相手である花巻(明郷の血縁上の父)に指示をしている。つまり、背景には母親の主體的な意思があったのである。密通によって生まれた明郷ではあるが、母親の積極的な関与があったにも拘わらずその母親の言葉は一切テクスト上に現れない。その代りに、「沙野に「妖婦」と語られた美鶴が出てくる。

そもそも「私」にとって美鶴とは、「それはつい一時間ばかり前に、あの四条のM会館の会場で私の源氏の話を書いた後、不思議な質問を出して私を当惑させた」(二〇〇頁)という『源氏物語』解釈に対して不思議な質問をした人物である。「私」はその解釈を「まあ、ちよつと面白い見方でもあるのよね。私、盲点をつかたようにも

感じたの。常識で見えないところにあるものをぬけぬけと言っているわけでしょ」(二〇二頁)と、興味深いものとして感じていた。そして、「私」は美鶴がそのような質問をした理由を探るために「私はいつか作者根性を出して」(二〇二頁)、「あ的美鶴さんという奥さんがどうしてそんなことを言い出したのかその根を知りたいような気がするわね」(二〇二頁)と、沙野に美鶴について話を聞いた。

沙野が語った内容は、すでに二節で確認をしたため繰り返さないが、重要なのは、語り手の「私」を導入することで美鶴や明郷といった森脇夫妻の周囲はいわゆる『源氏物語』との関係から理解できることである。

したがって「私」は、美鶴を沙野の語りから解釈して、女性の視点から「橋姫」に関するテーマの翻案を試みたのである。「橋姫」に関するテーマとは、出生に関することであり、『源氏物語』の薫は自身の出世の謎が明らかになっても、円地の言葉によれば「それがさしたる影響になって変って来ない」。一方、「交配花」の明郷は血統に固執し、結局運転手が実の父であることが分かったと自殺をした、と沙野に語られた。さらに薫的な属性を付与された明郷の周囲の女性、明郷の母や美鶴は『源氏物語』に出て来る女性たちとは違い、自ら積極的に密通を行っている。加えて、妻である美鶴は、明郷が公認してはいるが、明郷の子供以外に妊娠中の子供を含めると二人の子供がいる。明郷の周囲の女性たちは、母も密通し妻も密通をする、という反復が行われているのである。つまり、明郷の出生をめぐる物語は『源氏物語』と同様、密通、特に「女三の宮と柏木衛門

督との密通」に関係するが、女性の主体的な意思によって密通が行われたという『源氏物語』の読み換えを試みたのである。

したがって、「交配花」は、男性が能動的に密通を行う『源氏物語』を逆転させ、女性が能動的に密通を行う物語を提示したのである。それを沙野の語りでは美鶴を「妖婦」としたが、「私」を導入することで『源氏物語』の主題と関係し、それを逆転させた。すなわち美鶴を単なる「妖婦」とするのではなく、『源氏物語』を翻案するための視座として導入したのである。したがって、『源氏物語』の「橋姫」的なモチーフや人物像を次々と変形したともいえるだろう。

五 おわりに

「交配花」の沙野が「私」へと物語るあり方は、語りの事後性と構築された叙述によって編集されていた。その中で、沙野が「私」と語る森脇夫妻の物語は、美鶴が「妖婦」で、美鶴によって明郷が自殺したということであった。しかし、この内容はあくまでも沙野が語ったこととして強調される。というのも、「私」が『源氏物語』の現代語訳をしている最中であり、その「私」が回想的に語り直すこの夫妻の物語は『源氏物語』に引き付けて解釈できるだろう。したがって、「交配花」に『源氏物語』の現代語訳をする作家の「私」が導入された理由は、この作品を『源氏物語』の「橋姫」巻のバリエーションとして作り上げることにあった。

明郷の自殺は、このことを踏まえると円地の『源氏物語』の薫の

罪意識を記述した紫式部への「濁世厭離思想と罪の意識は、もう少し鋭く切り合ってほしい」という思いから『源氏物語』の「橋姫」の薫像を再創作した一面もあると考えることができる。さらに『源氏物語』の薫は自身の出生の秘密を知っても光源氏の次男として官位は、昇進し続ける。それに対して明郷は、森脇の副社長としていられなくなつて自殺する点で、矮小化された『源氏物語』の薫として準えられるだろう。

そもそも、薫は密通によつて生まれたという要素もある。したがつて、明郷が生まれる要因は「女三の宮と柏木衛門督との密通」から女性の積極性という読み換えがある。さらにそれを反復するように美鶴もある種の『源氏物語』の女性達の物語と関係のある人物となつた。

つまり、沙野によつて語られる物語では美鶴＝妖婦という側面であつたが、「私」を聞き手として導入することでその物語に『源氏物語』的な要素を読み込むことが可能となつた。その結果、「交配花」においては、沙野の語りによれば、明郷が美鶴に陥れられて自殺したとされていたが、そのこともやはり、『源氏物語』との関係から理解できるのである。

(さいだ はるな・言語文学専攻)

【注】

¹ 土屋萌子「交配花」、馬渡憲三郎、高野良知、竹内清己、安田義明編、

² 『円地文子事典』、二〇一一年四月、鼎書房、一二三頁。

³ 上坂信男『円地文子——その『源氏物語』返照』一九九三年三月、右文社、三六九—三七〇頁。

⁴ 土屋萌子「交配花」『円地文子事典』前掲書、一二二頁。

⁵ 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳『源氏物語』五(新編日本古典文学全集24)一九九七年七月、小学館、一四七頁。

⁶ 円地文子訳『源氏物語』八卷、一九七三年四月、新潮社、一二三頁。

⁷ 円地文子「罪の意識について」『源氏物語私見』一九七四年一月、新潮社。なお、引用は新潮社文庫(一九八五年一月)九四—九五頁による。

⁸ 円地文子「罪の意識について」『源氏物語私見』前期書、一〇三頁。

⁹ 『波』一九七二年一月、三—五月。

¹⁰ 土屋萌子「交配花」『円地文子事典』前掲書、一二二頁。

¹¹ 円地文子「罪の意識について」『源氏物語私見』前期書、一〇三頁。

¹² 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳『源氏物語』四(新編日本古典文学全集23)一九九六年一月、小学館、二二三—二四四頁。

¹³ 円地文子訳『源氏物語』六卷、一九七三年二月、新潮社、二一六—二一七頁。

* 円地文子「交配花」の引用は、『花食い姥』(一九七四年五月、講談社)による。